

『トピックで読み解く日本近世史』

安高啓明

昭和堂／2018年4月／2200円(税別)

本書の前半は南蛮貿易のころからの対外関係史と対キリスト教政策について、後半は近世中後期の幕政改革について、教科書の記述の基になる事実を詳しく取り上げている。特に九州での宗門改めの様子が具体的で、道具や人々の姿が興味深い。またその事実の裏付けとなる文字史料を短い分量で数多く挙げてくれている。教科書に出てくる法令の原史料とその内容を解説していて、授業ですぐに使えるものも多い。絵画や写真も豊富なのが嬉しい。

『フィレンツェ——比類なき文化都市の歴史』

池上俊一

岩波新書／2018年5月／960円(税別)

フィレンツェの政治史と文化史を適切に絡めた記述となっており、そのバランスが新書のサイズとしてふさわしいものに仕上がっている。著者は中世とルネサンスを連続的に捉え、またルネサンス期の中でも共和制期と、事実上のメディチ家独裁の時期での違いを強調する。それを騎馬槍試合など広場の利用や、芸術作品の解釈に適用する。なお、フィレンツェのローマ植民史時代から記述を起こしており、それをただのルネサンス前史と見ずに積極的に位置付けている。ちなみに地図が本の冒頭にあるので、本書の記述に出てくる教会などを、自分で地図に索引をつけながら読み進めてみたら、非常に楽しかった。

『これからの日本、これからの教育』

前川喜平／寺脇研

ちくま新書／2017年11月／860円(税別)

最近前川氏の講演を聴く機会があり、ユーモアに溢れた飾らない人柄に心打たれた。この本で印象に残ったのは、旧文部省時代にどんな傑物がいて、前川氏らはその方々に教えられながら、どんな理想を求めて日々活動されていたのか、ということだ。

綺麗事の観念論でなく、現場をよく調査した上で具体的な改革を国民の立場に立って模索する、官僚のお手本と言いたくなる姿が、ここにはある。また、この本を読んだ上で、講演を聴いていただと、印刷物にできない話の凄さに舌を巻かれることと思う。今の政治や歴代教育行政の裏側が、実によく透けて見える。

『平成の天皇制とは何か』

吉田裕・瀬畑源・河西秀哉編

岩波書店／2017年7月／2000円(税別)

来年2019年4月30日に現天皇が退位して平成は31年で終焉し、翌5月1日に現皇太子が新天皇として即位することが既に決定している。江戸時代後期の光格天皇以来、約200年ぶりとなる今回の生前退位は、直接的には2016年8月に明仁天皇が表明した「象徴としてのお務めについての天皇陛下のおことば」の中で退位を希望することを強くにじませたことに端を発しており、圧倒的多数の国民が退位に賛意を示している。この背景には、明仁天皇・美智子皇后の人格ばかりでなく、両者が形作ってきた「平成流」と称される現在の象徴天皇制への支持があると考えられる。そして現在は、天皇・皇后や「平成流」天皇制への疑問や批判は表明しづらい状況にあると言わざるを得ない。この「思考停止」から脱却して、今後の(象徴)天皇制の行方を議論するための材料として、多角的な切り口の9本の論文と3編者による座談会が収録されており、読み応え十分である。因みに、本書の副題には「制度と個人のはざまで」とある。

『5時に帰るドイツ人、5時から頑張る日本人』

熊谷徹

SB新書／2017年10月／800円(税別)

著者はNHK記者で8年働いた後、1990年からフリージャーナリストとしてドイツに在住している。題名通りの内容で、ドイツでは、「1日10時間をこえる労働や、日曜・祝日の労働は法律で禁止されている」そうである。それでいて、一人当たりの労働生産性は、ドイツは日本を46%上回る(2017年)とのこと。

教育の問題一つとってみても、こうした国際比較の根源には、文化の違いが横たわっていると思う。ではどうするか。簡単ではないが、自国の世界しか知らない状況を放置してはいけないことだけは確かだろう。

『部活があぶない』

鳥沢優子

講談社現代新書／2017年6月／760円(税別)

数多くの事例を元に、生徒・教員双方にとって「ブラック」なものとしてしまった部活の現状を抉り出し、本来の部活のあり方を提示する。部活指導に精力を傾ける評者にとっては、耳が痛い点多々。